

教育研究業績書

2023年10月23日

所属：英語グローバル学科

資格：講師

氏名：小野 薫里

研究分野	研究内容のキーワード
異文化コミュニケーション、英語学、言語学	英語教育、帰国子女、アイデンティティ形成、日米の教育制度
学位	最終学歴
修士（英語コミュニケーション）	青山学院大学 国際政治経済学部 国際経営学科修了 松山大学大学院 英語コミュニケーション学科修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 演習・卒業研究	2021年4月2022年3月	演習では、ゼミ活動の一環として、2泊3日の沖縄ゼミ旅行を計画した。沖縄の文化を体験しながら、教員とゼミ生同士の結束を固めた。卒業研究では、英語での論文指導にあたり、学生が執筆した卒業論文を文集にまとめた。
2. ゲストスピーカーによる多文化教育	2020年6月2022年7月	毎年恒例の新入生を対象とした、導入講義に於いて、日本在住のイスラム教徒の女性をゲストスピーカーに招聘した。イスラムに対する意識の変化を調査するため、100名程の受講生全員に対し、講演の前後の2回にわたり、Google formsによるアンケート調査を実施した。講演では、「イスラム」とは「平和」を意味すること、ハラールに関する誤った認識、日本でイスラム教徒として暮らすことの苦悩など、ムスリムに対する知識が増えることに比例して、相手の文化に対する理解も深まり、メディアによる影響で抱いていた「厳格」で「怖そう」というイスラムに対するステレオタイプなイメージが変わるなどの変化が見られた。この講演を機に、アジアの留学生と積極的に交流を図るため、異文化サークルに参加する学生も増えた。
3. 英語ディスカッションを取り入れた受講生参加型の授業	2020年4月2021年3月	英語コミュニケーション特殊講義では、HAFUなどのドキュメンタリー映画やCool Japanなどの動画も積極的に使用し、日米の謝罪の仕方の違い、日米の人種差別問題に対する意識の違いなどを取り上げ、毎回異なるトピックを英語でディスカッションやプレゼンテーションを行った。海外で起きている諸問題も、より身近な問題に置き換えてみることで、学生の問題意識が高まり、英語が苦手な学生も積極的に発言する学生が増えた。
4. オンラインによる検定英語対策の授業の実践例	2020年4月2021年3月	時事ニュースを取り上げ、Breaking News Englishなどのオンライン教材もテキストと併用した。リーディングの速度であるWord Per Minutesを上げることを目標に、様々な訓練を取り入れた。
5. リーディングの授業の実践例	2020年4月2021年3月	120名以上の履修希望者に対し、異文化コミュニケーションの内容を学びながら、リーディングスキルを伸ばす授業を実践した。学生による授業評価の満足度は非常に高く、楽しく異文化を学ぶことができたとのコメントを多数いただいた。
6. 学生の社会への関わりを意識を高める授業	2019年4月2020年3月	経営学部の学生を対象とした英語発表の授業では、県の特産物を3つ選び、その魅力を英語を使って海外に売り込むという課題を通して、学生の地域産業への関心や英語の知識を高める授業を心掛けた。県内企業への就職率が高いため、学習者の関心と英語を使う授業の実践を心がけた。
7. アクティブラーニングの実践例	2019年4月2020年3月	一年生を対象とした、英語による発表の授業では、外国人への街頭インタビューを実施。学生はグループに分かれ、事前に聞きたい質問を考え、教員に提出し、質問する英文を教員が添削した。後日、インタビュー内容をまとめて、パワーポイントでグループごとに発表といった、学習者が主体となる授業の実践を目指し

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. リーディング授業の実践例	2019年4月2019年9月	た。 音韻律のインプット (Phonological input) に重点を置いた、トップダウン方式によるリーディング授業の実践によって、学生の自立的な学習を促した。テキストの重要単語を類義語に置き換えて、教員が読み上げるなど、学生の集中力を切らさない工夫も心がけた。またTEDプレゼンテーションのスク립トを通して、活きた英語表現を学んだ。単語や熟語の解説に於いては、それぞれの表現の持つ微妙なニュアンスの違いについて解説しながら語彙を増やした。
9. 大学社会連携講座の授業	2018年4月2019年3月	地域の主婦層やシニアの方々を対象に、異文化コミュニケーションと隣り合わせで英語を指導した。異文化比較の教材として (英Jamie Oliver、伊Giada de Laurentiis) の料理動画を教材に使用し、日本の伝統的な料理番組の動画と比較したあと、受講生に文化的な違いをディスカッションしていただき、林 (1994, 2011) のアナログ思考・デジタル思考のフレームワークにつなげて解説した。
2 作成した教科書、教材		
1. 異文化コミュニケーションと隣り合わせで英語を学ぶ為のワークブック	2018年4月刊行	異文化接触のありようを具体的かつ理論的に整理することを通して、自文化と他文化の違いを知ることにより、自分自身と自文化を理解する。「違い」は楽しいことの重要性を実践的な英語表現を交えながら学び、現代社会のアイデンティティのあり方を考えるための教材。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 外資系ホテルでのコンシェルジュ業務 2. スカイプによる発音指導 3. 海外駐在員に対する英語と異文化研修		外資系ホテルで外国人ゲストの接客対応、本社との会議通訳・アテンド通訳業務を担当した。 海外駐在の日本人の主婦や子供たちに、発音指導を実施した。 海外駐在予定の銀行員の方々やその家族を対象に、生活するために必要な、サバイバルイングリッシュ講座を開講した。
4 その他		
1. ゲストスピーカー	2018年11月	英米文学科、ブルース・ランダー先生ゼミ (4 回生) 帰国子女としてのアイデンティティ、修士論文のデータ収集方法、書き方、質疑応答等 (90分)
2. 招聘ゲスト・スピーカー (プレゼンテーション、面接聴取法による言語調査協力)	2018年11月	英米文学科 久屋愛実先生ゼミ (3 回生) プレゼンテーション発表 (30分) テーマ: わたしの言語形成の歴史 (日本語・英語習得の過程) 面接聴取法による言語調査協力 (60分) 1) 依頼表現 (日・英語話者として) 2) 褒め言葉に対する返答 (日・英語話者として) 3) 英語の代名詞について (英語話者として) 4) 英語の文法事項について (英語話者として)
3. ゲストスピーカー	2018年7月	英米文学科 ジェイ・アーカンブラック先生ゼミ (3 回生) アメリカ文化、帰国子女としてのアイデンティティ 質疑応答等 (90分)
4. ゲストスピーカー	2018年6月	英米文学科 ブルース・ランダー先生ゼミ (4 回生) 帰国子女としてのアイデンティティ、修士論文のデータ収集方法、書き方、質疑応答等 (90分)
5. ゲストスピーカー	2017年12月	英米文学科 ジェイ・アーカンブラック先生ゼミ (3 回生) アメリカ文化、帰国子女としてのアイデンティティ

教育上の能力に関する事項				
事項	年月日		概要	
4 その他				
			質疑応答等(90分)	
職務上の実績に関する事項				
事項	年月日		概要	
1 資格、免許				
1. TOEIC			990点	
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
1. オープンキャンパス模擬授業		2021年8月	オープンキャンパスにて「異文化コミュニケーションと隣り合わせで英語を学ぶ」というテーマで模擬授業を行った。	
2. 高校への出張講義		2021年1月	第一学院高等学校に、異文化コミュニケーション・英語の学習について出張講義を行った。	
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. A Study of Better Adaptation of Returnees to Japanese Culture and Education	単	2019年3月発行	松山大学大学院修士論文 英文、全7章、134頁	本研究は、海外生活が児童にどのような心理的作用を及ぼし、また、アイデンティティ形成に影響を与えるかを考察した。そこで、著者の小学生時代の日記に観察されたアメリカでの文化体験におけるデータと2016年11月に実施した現代の小学生の帰国子女40人を対象としたアンケート調査結果をグラウンデッドセオリーの次元分析法を用いて分類、バリー(2005)の異文化適応プロセスモデルを使用し、分析した。その結果、帰国子女が日本に帰国する際に経験したストレス要因について4つのカテゴリーを抽出することができた。被験者の児童の内、二人が「適応」を獲得している事が明らかになった。本研究は、様々な文化を背景とする子供達を教える教師への多文化対応研修プログラムが県やコミュニティーレベルで実施される事を求め、行政に多文化社会に向けたガイドラインの作成を提案する。(異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女のアイデンティティ)
3 学術論文				
1. Implications of a Guest Speech by a Malaysian Muslim Living in Japan on Japanese University Students	単	2022年12月31日刊行	広島大学大学院人間社会科学研究所 紀要、総合科学研究 査読付	This study examined the impact of a speech by a female Malaysian Muslim guest speaker on Japanese university students. Qualitative data analysis categorized the responses into: "Japanese students' stereotypes and prejudice toward Malaysian culture and Muslims," "Japanese students' past knowledge of Malaysian culture and Muslims," and "Japanese students' interest in learning more about Malaysian language, culture, and religion." After transcribing the comments, the student data were further classified using Milton J Bennett's model of intercultural sensitivity development, DMIS (1986, 2011, 2013). The survey results showed that Japanese students' attitudes toward foreigners and other cultures improved. Although the number of students studying abroad is increasing, we know little about the impact of one-year sojourn on their identities. To investigate this, the author conducted interviews with 10 students who had studied abroad and asked them a series of 15 questions that asked how they viewed themselves before and after their study abroad experience. Milton J Bennett's Developmental Model of Intercultural Sensitivity, DMIS (2009, 2013) was employed to analyze student data to explicate Japanese university students' identity formation processes. The results of the
2. Cultural Identity Shifts After Study Abroad	単	2021年10月	松山大学論文集 第33巻4号	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
3.How Intercultural Experiences Created Identities of Returnees : A Comparison of kikokushijo in the Taishou, Showa and Heisei eras	単	2019年4月	松山大学論文集 第31巻1号	analysis were that most of the Japanese students established their global identities by adjusting themselves to the host culture. This research reports on their identity formation process and discuss what roles educators can play in supporting those Japanese students who have had intercultural conflicts during their studying abroad from a cultural perspective. 日本は多民族国家であるにも関わらず、今も尚、世界からはclosed society閉ざされた社会との認識が強い傾向にある。そこで本研究は、帰国子女のアイデンティティ形成の過程を大正、昭和、平成という3つの時代を超えて、帰国子女間の共通点や相違点を体系的に分析した。大正時代の帰国子女のデータとして、14歳で渡米(密航)し、苦学の末UCLAを卒業、日本の役人になる事を夢見て帰国、京都帝国大学で博士号を取得するも「異質な存在」として日本社会に受け入れられず、GHQ顧問となった筆者の曾祖父のライフストーリーと、昭和時代の著者の日記データ、平成時代の帰国子女40人にアンケート調査を実施した。日本文化に適応できずに葛藤を抱えている児童が多い日本社会や日本の教育現場に再検討する契機を提唱している。(異文化コミュニケーション、アメリカ文化、帰国子女のアイデンティティ)
4. Analog and Digital Intercultural Perception- The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan	単	2018年9月発行	言語文化研究, 38 (1-1)	本研究は、グローバル化する日本の教育現場で日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、英語教育と隣合わせで自身のメンタルモデルを意識し、活用することの可能性を検討することを目的とする。そこで、日本在住の欧米人教授43名を対象に、左右の脳の主導性に関する1-6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的に検討した。この結果から、多文化共存の環境を創るためには「文化によって刷り込まれ本人も自覚しないうちに持っている思考パターン」を認識し、「状況に応じて柔軟にシフトする能力」が重要になる事が示唆された。に持っている思考パターン」を認識し、「状況に応じて柔軟にシフトする能力」が重要になる事が示唆された。 (異文化コミュニケーション、外国人教授、英語教育)
5.The Reintegration of Kikokushijo: Reflections on Culture and Identity	単	2018年9月発行	言語文化研究, 38 (1-2)	本研究では、現代の小学生の帰国子女40人を対象としたアンケート調査結果をベリー(2005)の異文化適応プロセスモデルを使用し、帰国子女児童のアンケート調査を分析した。その結果、帰国子女が日本に帰国する際に経験したストレス要因について4つのカテゴリーを抽出することができた。被験者の児童の内、二人が「適応」を獲得している事が明らかになった。 (異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女のアイデンティティ)
6.Returnees' Reentry Struggles to Japanese Culture and Education Exploring the	単	2017年12月発行	松山論叢第37号掲載 (p21~p45)	本研究は、帰国子女が日本に再適応する際に経験する様々な葛藤を検討した。また、日本とアメリカの文化や教育制度の類似点・相違点も比較・分析した。著者の小学生時代のアメリカ生活及び、帰国後の生活を観察した日記データと現代の帰国子女40人を対象に半構造化アンケートを実施し、質的に検討した。その結果、左脳主導型の西欧から帰国した児童の方が、右脳主導型のアジアから帰国した児童よりも、日本に再適応する際に様々な葛藤を経験した事が明らかになった。以上の結果から、幼少期に滞在した国の文化が児童の思考パターンに重要な影響を及ぼし、日本に帰国後、様々な葛藤として表れたことが示された。 (異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女のアイデンティティ)
7. Intercultural Identities of Kikokushijos - A Comparison of Returnee Experiences in Three Different	単	2017年12月発行	松山論叢第38号掲載 (p23~p54)	本研究は、大正、昭和、平成という3つの時代を超えて、帰国子女間の共通点や相違点を体系的に分析した。14歳で渡米(密航)し、苦学の末UCLAを卒業、日本の役人になる事を夢見て帰国、京都帝国大学で博士号を取得するも「異質な存在」として日本社会に受け入れられず、GHQ顧問となった筆者の曾祖父のライフストーリーと、著者の日記データ、現代の帰国子女40人にアンケート調査を実施した。本研究は、多文化社会としての日本社会を再検討する契機を提唱し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Eras				ている。(異文化コミュニケーション、アメリカの教育制度、帰国子女のアイデンティティー)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1.How study abroad experiences alter beliefs in cultural identity	単	2020年11月	SIETAR Japan Online Conference 2020 2020シーター ジャパン オンライン年次大会	This study indicates how study abroad experiences for prolonged periods of time ranging from 3 months to a year, have influenced student identities. Eleven students, 7 female and 4 male ranging in age from 20-23, were interviewed by the researchers up to two months after returning to Japan. Interviews comprised of a series of 15 questions that asked recipients how they viewed themselves before and after their life changing experience. Results have suggested that study abroad can alter national identity beliefs and illustrate a shift in cultural identity.
2.Cultural Identity Shifts After Study Abroad	単	2020年5月	JALT PanSIG 2020 Intercultural Communication and Mobility	This study indicates how the identities of students who have studied abroad for various lengths of time ranging from 3 months to a year, have changed over time. 11 students were asked a series of 15 questions that asked them how they viewed themselves before and after their study experience. This research may be of interest to those wishing to discover more about the complex identity issues students have during and on returning from prolonged study abroad experiences.
3.The Reintegration of Kikokushijo : Reflections on Culture and Identity	単	2019年10月	異文化コミュニケーション学会 Differences Conference 京都産業大学 “Living on the Edge: The Joys & Challenges of Being Different in Japan”	本研究では、現代の小学生の帰国子女40人を対象としたアンケート調査結果をベリー(2005)の異文化適応プロセスモデルを使用し、帰国子女児童のアンケート調査を分析した。その結果、帰国子女が日本に帰国する際に経験したストレス要因について4つのカテゴリーを抽出することができた。被験者の児童の内、二人が「適応」を獲得している事が明らかになった。
4.The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan	単	2019年6月	第10回JALT全国語学教育学会四国支部 愛媛大学 発表言語 英語	本研究は、グローバル化する日本の教育現場で日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、英語教育と隣合わせで自身のメンタルモデルを意識し、活用することの可能性を検討することを目的とする。そこで、日本在住の欧米人教授43名を対象に左右の脳の主導性に関する1-6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的に検討した。この結果から、多文化共存の環境を創るためには「文化によって刷り込まれ本人も自覚しないうちに持っている思考パターン」を認識し、「状況に応じて柔軟にシフトする能力」が重要になる事が示唆された。に持っている思考パターン」を認識し、「状況に応じて柔軟にシフトする能力」が重要になる事が示唆された。
5.Analog and Digital Intercultural Perception	単	2019年6月	第9回JALT全国語学教育学会四国支部 四国学院大学	本研究は、英語教育の観点から、グローバル化する日本の教育現場で日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、自身のメンタルモデルを意識し、活用することの可能性を検討することを目的とする。そこで、日本在住の欧米人教授43名を対象に左右の脳の主導性に関する1-6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的に検討した。この結果から、自身の文化と異なる学生を指導する際には、自身の文化パターンのみにとらわれず、相手の文化パターンも自由にシフトする事が出来る能力が重要になり、その為には、自身のメンタルモデルを自覚する事が何よりも重要である事が示唆された。
6.Bilingualism and Identities-A	単	2019年1月	全国語学教育学会 JALT松山支部	本研究は、バイリンガリズムとアイデンティティー形成の観点から、大正、昭和、平成という3つの時代を超えて、帰国子女間の共

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Comparison of Returnee Experiences in Different Eras			愛媛大学 バイリンガリズム ミニカンファレンス Matsuyama JALT Bilingualism Mini-Conference	通点や相違点を体系的に分析した。大正時代の帰国子女のデータとして、14歳で渡米(密航)し、苦学の末UCLAを卒業、日本の役人になる事を夢見て帰国、京都帝国大学で博士号を取得するも「異質な存在」として日本社会に受け入れられず、GHQ顧問となった筆者の曾祖父のライフストーリーと、昭和時代の著者の日記データ、平成時代の帰国子女40人にアンケート調査を実施した。本研究は、多文化社会としての日本社会を再検討する契機を提唱している。
7. Analog and Digital Intercultural Perception -The cultural impact on pedagogical decisions of foreign teachers in Japan	単	2018年8月	第33回異文化コミュニケーション学会 国際大会 中央大学, 多摩キャンパス 大会テーマ: 「異文化共存に向けて: 不確実な未来に共に向き合う」 “Facing uncertain times together Strengthening intercultural connections”	本研究は、グローバル化する日本の教育現場で日本人学生とは異なる文化的背景を持つ言語教員が、英語教育と隣合わせで自身のメンタルモデルを意識し、活用することの可能性を検討することを目的とする。そこで、日本在住の欧米人教授43名を対象に左右の脳の主導性に関する1-6のリッカート尺度によるアンケート調査を実施し、量的・質的に検討した。この結果から、多文化共存の環境を創るためには「文化によって刷り込まれ本人も自覚しないうちに持っている思考パターン」を認識し、「状況に応じて柔軟にシフトする能力」が重要になる事が示唆された。
8. The Reintegration of Kikokushijo - Reflections on Culture and Identity	単	2018年5月	JALT全国語学教育学会定例会松山支部 愛媛大学(愛大ミュージズ)	本研究では、現代の小学生の帰国子女40人を対象としたアンケート調査結果をベリー(2005)の異文化適応プロセスモデルを使用し、帰国子女児童のアンケート調査を分析した。その結果、帰国子女が日本に帰国する際に経験したストレス要因について4つのカテゴリーを抽出することができた。被験者の児童の内、二人が「適応」を獲得している事が明らかになった。
9. Exploring the Intercultural Identities of Kikokushijos- A Comparison of Returnee Experiences in Three Different Eras	単	2017年10月	第32回異文化コミュニケーション学会 年次大会 上智大学, 四谷キャンパス 大会テーマ: “Promoting Equity and Social Change: Acknowledging the Diversity Within” 「公正な社会への変革をめざして: 内なる多様性を再考する」	本研究は、大正、昭和、平成という異なる3つの時代を超えて、帰国子女間の共通点や相違点を体系的に分析した。世代を超えた帰国子女の質的・量的データを通して、帰国子女の苦悩を紐解くだけでなく、多文化社会としての日本社会を再検討する契機を提唱した。
10. A Study of Better Adaptation of Returnees to Japanese Culture and Education.	単	2017年2月	松山大学大学院 言語コミュニケーション研究科 第5回定例会	本発表では、著者の小学生時代の日記に観察されたアメリカでの生活における葛藤についてのデータと2016年11月に実施した現代の小学生の帰国子女40人を対象としたアンケート調査結果を文化の氷山モデルを使用し、日本とアメリカの文化や教育制度の類似点・相違点を比較分析した。
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2021年8月	オープンキャンパス模擬授業
2. 2021年1月	第一学院高等学校 出張講義
3. 2016年6月～現在	JALT全国語学教育学会松山支部 2019年 Best Member of the year 受賞
4. 2015年4月～現在	異文化コミュニケーション学会 SIETAR Japan